# 法勝寺跡発掘調査概報

## 昭和61年度

京都市文化観光局
財団法人京都市埋蔵文化財研究所

千年の歴史にはぐくまれた学問,芸術,文化,宗教の都であることをふまえながら,21世紀へ向けての理想のまちづくりを目指している京都は,伝統を生かし創造をつづける都市づくりに取組み,なかでも,2年後(昭和64年)の市政100周年事業並びに7年後(昭和69年)の平安建都1200年事業などを計画しております。

一方,都市の活性化に伴う開発に際して,埋蔵文化財を保存し,良好な環境を維持することが重要な課題となっております。このような状況の中で,本市といたしましては,埋蔵文化財

の保存について、市民の理解と協力を得る努力をいたしておりますが、保存が困難な遺跡につきましては、調査を行いその成果をできる限り後世に伝えるように努めております。

この調査報告書は、昭和61年度国庫補助事業として実施した 調査の概要をまとめたものであり、本書が埋蔵文化財の研究に、 また有用な資料として御活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵 文化財研究所、また御指導いただいた文化庁をはじめ御協力を いただいた関係各位並びに市民のみなさまに心から感謝の意を 表します。

昭和62年3月

京都市文化観光局

### 例 言

- 1 本書は、昭和61年度の文化庁国庫補助事業における、法勝寺跡発掘調査の概要報告である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 図中に使用した X・Yの数値及び方位は、平面直角座標系 Ⅵによる。標高は、T.P.を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行の都市計画基本図 (2500分の1)・岡崎を修正して使用した。
- 5 写真は、遺構・遺物とも牛嶋 茂が撮影した。
- 6 本書の執筆は、主に瓦を上村和直が、他を辻 裕司が行い、両者が編集を担当した。

## 本文目次

1	調査経過	
2	遺構	
3	遺物	
4	まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2

## 図 版 目 次

図版一 遺跡 1 アドバルーン空撮 (東から)

2 調査区全景(北から)

図版二 遺跡 アドバルーン空撮全景 (上から)

図版三 遺跡 1 北縁雨落溝 (西から)

- 2 西縁雨落溝(北から)
- 3 礎石据付穴二・1 (南東から)
- 4 礎石据付穴三・1 (西から)

図版四	遺物	出土土師器
図版五	遺物	出土軒丸瓦
図版六	遺物	出土軒丸瓦
図版七	遺物	出土軒丸瓦
図版八	遺物	出土軒平瓦
図版九	遺物	出土軒平瓦
図版十	遺物	出土軒平瓦
図版土	遺跡	遺構実測図
図版主	遺物	出土軒丸瓦拓影・実測図
図版 <u></u>	遺物	出土軒丸瓦拓影・実測図
図版古	遺物	出土軒丸瓦拓影・実測図
図版玄	遺物	出土軒丸瓦拓影・実測図
図版去	遺物	出土軒平瓦拓影・実測図
図版七	遺物	出土軒平瓦拓影・実測図
図版大	遺物	出土軒平瓦拓影・実測図

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図1
図 2	雨落溝断面図3
図 3	金堂·東西廊模式図4
図 4	礎石実測図5
図 5	下層遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
図 6	出土土師器実測図・・・・・・・8
図 7	出土へラ記号・刻印拓影10
	表目次
表 1	出土軒瓦観察表14
表 2	出土軒瓦計測表21

## 法勝寺跡発掘調查概報

#### 1 調査経過

調査地点は、京都市左京区岡崎法勝寺町30に所在する。当該地に民家が新築されることに伴い、遺跡確認の目的から事前に試掘調査が実施された。試掘調査の結果から、遺構検出面は浅く、上面は削平を受けているものの、礎石据付穴、溝、瓦溜等の遺構が検出され、遺存状況は比較的良好であり、金堂及び左右にとりつく回廊の復原に極めて重要な地点であることが明らかになった。よって発掘調査に切り替え、調査を実施することになった。発掘調査は、試掘調査の成果を踏まえ、検出された東西溝以南が回廊部分に該当することが考えられることから、この地区を中心に調査区を設定し、調査終了後東西溝の北で検出された瓦溜の調査を行うこととした。発掘調査は1986年4月1日から同年5月15日まで実施した。調査面積は全体で約247㎡ある。

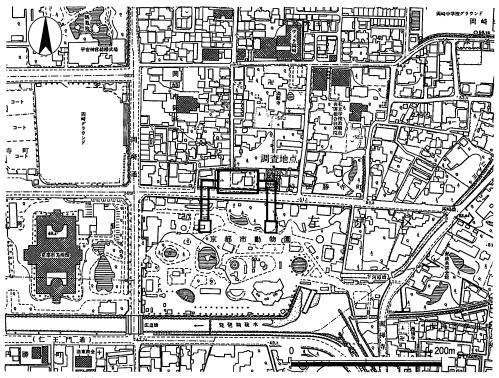


図1 調査位置図

調査地点は、六勝寺中の筆頭伽藍である法勝寺境内のほぼ中央東寄りに位置する。調査地点周辺ではこれまでに数箇所で発掘調査が行われている。西方では1974・75年度の2次にわたり発掘調査が実施され、荘大な金堂跡が検出された。金堂跡は、現二条通の歩道から約2mの高まりに現存する。その高まりから東へ数十センチメートルずつ、2段の段差で低位となり調査地点に至る。調査地点は同歩道から約80cm高まる。また金堂の東方から南面する地域に広大な池が拡がっていたとされるが、1972・80年度の発掘調査では池の肩口が検出されている。寺域については、復原図などによって示されているものの、次に記すもの以外に発掘調査等によって確認されたものはない。法勝寺西限については岡崎動物園内西北部の発掘調査で南北溝が検出されている。

調査の結果、雨落溝、礎石据付穴など法勝寺回廊を構成する遺構のほか、瓦溜、礎石抜取穴、及び法勝寺建立前の下層遺構などを検出した。また検出遺構を総合すると、回廊は調査区内で直角に折れ曲がることから、回廊の位置が確定できることになり、法勝寺を復原研究するうえで極めて重要な遺構であることが判明した。また出土した土器・瓦類についても比較的まとまっており、法勝寺及び法勝寺建立前の当該地における歴史的変遷を考察するうえで更に資料を提示できるものと言える。

なお上述した回廊については、土地所有者の全面的かつ積極的な協力が得られ、土盛り 及び設計変更等によって、現状のまま全面保存されることになった。

#### 2 遺構

#### 層序

調査区の基本層序は、現表土が厚さ約20cmあり、表土下は調査区中央以南に、にぶい黄褐色砂泥層が厚い箇所で約20cm堆積する。この層中には瓦を多く包含する。この層を除去した時点で全体ににぶい黄褐色泥砂層となる。この層は厚さ約20cmあり、瓦、土器の細片を包含する。各遺構はこの上面で検出した。にぶい黄褐色泥砂層下は黒褐色砂泥層が厚さ20~50cm堆積する。極めて僅かであるが土器の細片が含まれる。黒褐色砂泥層下は、暗褐色泥砂層、にぶい黄橙色粗砂層などが堆積する。これらの層中に遺物は包含していない。

#### 遺構

検出した遺構には、雨落溝、礎石据付穴、瓦溜、礎石抜取穴、下層遺構などがある。

回廊基壇に伴う地業については、調査区内では検出していない。遺構の遺存状況などを 観察すると、大半の遺構上面は削平を受けていると考えられる。ただし回廊内側柱筋から

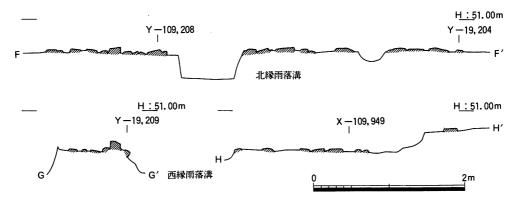


図2 雨落溝断面図

南へ約1.7 m の地点でにぶい黄褐色泥砂層に密着した状態で、長径20〜25cmの扁平な河原 石を2個検出した。河原石はその位置から推定して、回廊基壇外装の延石の可能性もある。

#### 雨落溝

雨落溝は南縁の溝を除き、北・東・西の各溝を検出した。

北縁雨落溝は、東西方向に約10mにわたり検出した。検出面での規模は、0.9~1.1m、深さ約10cmある。溝底面の西半には石敷がある。石敷幅は遺存状態の良好な箇所で約60cmある。長径10~30cm大の扁平な河原石を比較的密に敷く。概ね長軸を東西方向に合わせ、3列に並べるものの、やや不規則な箇所もある。石材は、頁岩、砂岩が多く、チャート、礫岩、石英岩などがある。肩口に沿って一部に赤(明褐色)・黄(明黄褐色)粘土が認められる。これは後述する礎石据付穴には例外なく認められる、根石を固定する作業工程時に使用される赤・黄粘土と同一のものであり、この場合も雨落溝構築時に使用されたものと言える。なお東半は石敷が抜き取られるが、一部に赤・黄粘土が遺存している。

西縁雨落溝は、長さ約2mを検出した。上面及び西・南端は、抜取りや攪乱によって削平を受ける。溝底面には石敷がある。石敷上面には厚さ1~2cm程にぶい黄褐色粗砂が堆積する。検出面から石敷上面までの深さは23cmある。石敷には20~30cm大の扁平な河原石を使用する。石敷の東西両辺の石は、その長軸をほぼ南北方向に合わせ並べ、その間に比較的密に石を埋め込む。石敷幅は約70cmある。また石敷北西端の石3個は、長軸を東西方向に合わせることから南縁雨落溝との交点の可能性がある。石敷東辺に接して河原石を1個検出した。平坦面を溝側に合わせ、石敷上面との高低差は12cmある。石敷の石材には砂岩が最も多く、頁岩、チャート、礫岩などがある。

東縁雨落溝は、南北方向に長さ約13mにわたり西肩口を検出した。東肩口は調査区東端

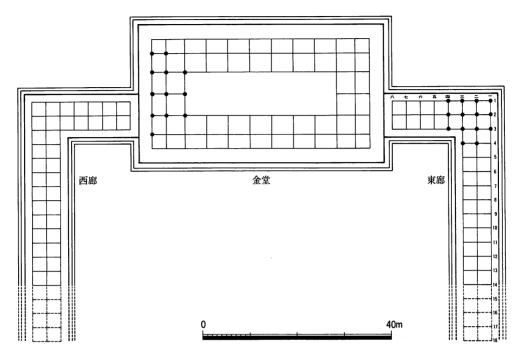


図3 金堂・東西廊模式図 (黒丸は礎石据付穴の検出箇所を示す)

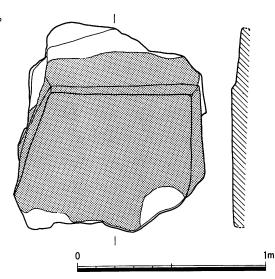
礎石据付穴

に長さ約1mのトレンチを設定し調査したが検出できなかった。検出面から溝底までの深さは6~20cmある。暗褐色泥砂が堆積する。石敷は中央付近で僅かに10~40cm大の扁平な河原石を検出したのみで、他は抜き取られる。中央以北では、一部で南北方向に連なる赤・黄粘土が溝底に沿って2条遺存しており、石敷の位置がほぼ推定できる。幅は約70cmある。

礎石据付穴は、14基検出した。1基については礎石抜取時に完全に削平され存在しない。14基の礎石据付穴も礎石抜取穴によって削平を受け、遺存状態は悪い。只各礎石据付穴も根石の据付時に赤・黄粘土を使用しており、周囲の土層と明瞭に識別でき、ほぼその位置を限定、復原できる。礎石は、原位置を保つものはない。礎石は、礎石抜取穴に落し込んだものを3個検出した。1個はほぼ完存し、2個は割られている。礎石の抜取りは、抜取穴の埋土がほぼ同一であることから同時期の作業と言える。一基から染付陶器が出土した。なお礎石据付穴については、北東隅のものを起点として西(漢数字)及び南(算用数字)に向かって各々数字を付し、東西方向を優先として、直交する数字の組合わせによって表記する。次に比較的遺存状態の良好な据付穴、及び特徴的な据付穴などについて概略を記す。

検出した据付穴の中で最も良好である。 平面形は、ほぼ円形を呈し、検出面で の規模は、現存長で東西約1.6m、 南 北約1.2m、深さ34cmある。底面に粘 土を貼り、その上面に長径10~25cm大 の河原石を円形に配する。

礎石据付穴三・1は、西半を抜取穴により削平を受ける。根石は数個遺存する。平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は、現存長で東西約1.1m、南北約1.2m、深さ35cmある。 抜取穴



には根石と礎石が落とし込まれる。根 図4 礎石据付穴三・1 に伴う礎石実測図石は10~35cm大のものが32個ある。礎石は花崗岩の自然石を使用し、上面はほぼ全面に加工痕が認められる。規模及び平面形は、1.1×1 m のほぼ方形を呈し、厚さ約50cmある。上面は3方向を削り、造出しを設ける。造出しの隅角度は、上辺で一方が約90度、一方が約110度ある。

礎石据付穴一・2は、東半を抜取穴によって削平を受ける。根石は僅かに遺存する。平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は現存長東西約1.1m、南北約1.9m、深さ27cm。

礎石据付穴三・2は、南東部の大部分を抜取穴によって削平を受ける。検出面での規模は、現存長で東西約0.8m、南北約1m、深さ23cmある。抜取穴には半截された礎石が落とし込まれる。礎石は花崗岩の自然石を使用している。表面は風化が激しく観察は困難である。規模は、北側の破片で長軸1m、短軸約0.7m、厚さ約30cmある。

礎石据付穴四・2は、西半が調査区外にある。平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は、東西約0.8m、南北約1.3m、深さ約25cmある。

礎石据付穴二・4は、西南の大部分を抜取穴によって削平を受ける。検出面での規模は、現存長東西約0.8m、南北約0.9m、深さ13cmある。 抜取穴には根石と破砕された礎石がある。根石は10~30cm大の河原石で約20個ある。礎石は花崗岩で、おおよそ8個に割られる。

なお据付穴及び抜取穴の根石については、各々4~40個ある。根石の材質は、判明した 155個について述べると、チャート66個と頁岩43個が多く、その他砂岩22個、礫岩9個、 花崗岩8個、石英岩3個、アプライト3個、凝灰岩1個などがある。

#### 瓦溜

回廊の北側で3基検出した。互いに接した位置にある。

瓦溜1は、東辺が削平を受け、西辺は調査区外にある。平面形は三角形状を呈し、検出面での規模は、現存長で、長軸3.82m、短軸2.74m、深さ約70cmある。埋土は暗褐色泥砂、褐色泥砂、オリーブ褐色粗砂などからなり、各層から大量の瓦が出土した。

瓦溜2は、瓦溜1の東辺に接した位置で検出した。西北部は削平を受ける。検出面での規模は、現存長で、長軸2.2m、短軸1.25m、深さ約50cmある。埋土は暗褐色泥砂、にぶい黄褐色泥砂、黒褐色泥砂などからなり、各層から大量に瓦が出土した。また底面にほぼ接した状態で黒褐色泥砂から土師器皿がまとまって出土した。

瓦溜3は、瓦溜1の南西辺に接した位置で検出した。西部は調査区外にある。検出面での規模は、現存長で、東西約0.9m、南北約1.2m、深さ約50cmある。埋土は暗褐色泥砂などからなり、大量の瓦が出土した。

#### 下層遺構

検出した遺構は全て保存される為、従って下面については調査を行っていない。ただし 調査区の北縁雨落溝より北側は順次掘り下げ、下層遺構の検出を行ったが、遺構は検出し

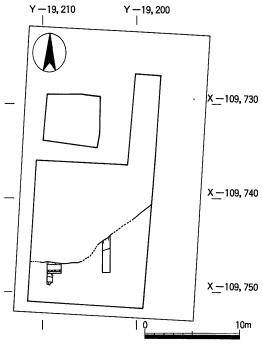


図 5 下層遺構平面図

ていない。また回廊直下については、無 遺物層に達する各遺構の断面を全て観察 したが、下に記す溝状あるいは流路状を 呈する遺構のほかは検出していない。

下層遺構についてその形状、堆積状況 や遺物採集の目的で、2箇所に断割を行った。遺構検出、断割及びその他の遺構 の壁面観察などから復原すると、北肩口 は、調査区中央以東では北東から南西方 向を示し、調査区中央でやや折れ西行する。

東方の断割では、北肩口を検出した。 検出面から底部まで約1.1mあり、底部 はほぼ平坦である。底部上面には、厚さ 3~20cm程にぶい黄褐色粗砂が堆積し、 古墳時代後期の土師器、須恵器が出土し た。この上面には、にぶい黄褐色微砂・細砂の互層堆積がみられ水の流れを示す。この層 まではほぼ水平堆積を示し、これより上層は、南がやや立ち上がり、断面では溝状を呈す る。この溝状堆積のうち灰黄褐色泥砂層などから、平安時代後期の土師器を主体に瓦など 大量の遺物が出土した。

西方の断割では2条の溝を検出した。北溝は、検出面での規模が、幅1.05m、深さ50cm ある。最下層の褐色粗砂層は、粒子が均一である。中位のにぶい黄褐色砂泥層から平安時代後期の土師器を主体に大量の遺物が出土した。南溝は、検出面での規模が、幅1.23m、深さ50cmある。最下層のにぶい黄褐色粗砂層は、粒子が均一である。黒褐色粗砂層から土師器などが少量出土した。

#### 3 遺物

遺物は、各遺構から遺物整理箱で128 箱出土した。遺物内容は、土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉陶器、無釉陶器、輸入陶磁器、瓦などがある。遺物のうち瓦の出土 量が最も多い。土器類では、土師器が多数を占め、他は小片で量も極めて少ない。

#### 土器

回廊という遺構の性格上、今回の調査では法勝寺創建以後のものは、瓦溜2出土のものを除き極めて少ない。従ってここでは、下層遺構と瓦溜2から出土した土器について概略を述べる。なお瓦溜1・3からは土師器が出土したが量も少なく細片である。

下層遺構出土土器(図6 1~38)

土師器、須恵器、黒色土器、無釉陶器、輸入陶磁器などが、遺物整理箱で20箱出土した。 土師器には完形あるいは完形に近いものが多い。土師器のほかは1〜数片出土した。なお 下層のにぶい褐色粗砂から古墳時代後期に属する土師器、須恵器の小片が僅かに出土した。 土師器には皿があり、形態・法量により8種ある。 I 類1・2、 II 類、が多数を占める。 I 類は、口縁部が斜め上方に立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。法量により4種 に分けることができる。平均的な法量を示すと、 I 類1(18~25)は口径11.0cm、器高2.0 cm、 I 類2(26~32)は口径14.0cm、器高2.5cm、 I 類3(33~35)は口径16.0cm、器高3.0cm、 I 類4(36~38)は口径18.0cm、器高3.9cmある。 手法は、底部外面をオサエ、内面は不定 方向のナデ、口縁部は2段ナデを行う。このうち I 類4 については、内面の底部から口縁 部にかけて更に斜め上方のナデによって仕上げる。

Ⅱ類は、口縁部が強く屈曲し、口縁端部は丸くおさめるものと、上方に立ち上がるもの

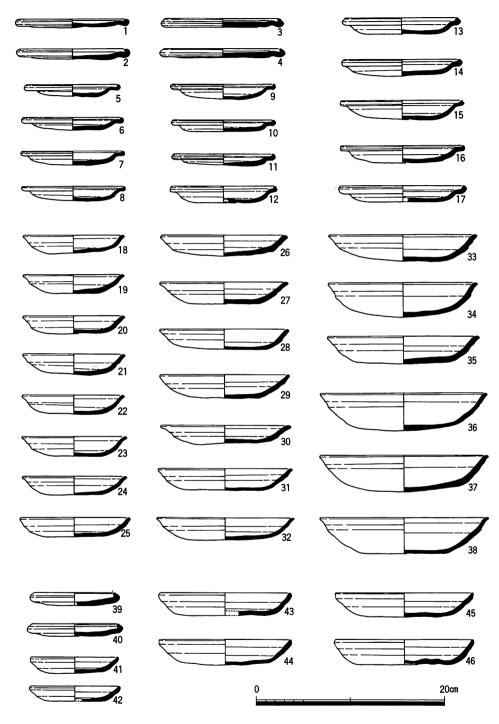


図 6 出土土師器実測図

がある。法量により2種に分けられる。平均的な法量を示すと I 類1 (5~12)は口径11.0 cm、器高1.3cm、 I 類2 (13~17)は口径13.1cm、器高1.8cmある。手法は、底部外面をオサエ、内面は I 類1 が直線方向のナデ、 I 類2 は不定方向あるいは直線方向のナデを行う。 口縁部には強いナデを行う。

■類は、扁平な形態を呈し、口縁部は強く内方へ折り曲げる。法量により2種に分けられる。平均的な法量を示すと、■類1(1・2)は口径12.0cm、器高1.0cm、■類2(3・4)は口径13.3cm、器高0.9cmある。手法は、底部外面をオサエ、口縁部直下の底部外面をやや強いナデ、内面は不定方向のナデを行う。

瓦溜2出土土器 (図6 39~46)

**擴底面にほぼ接した状態で、完形あるいは完形に近い土師器が比較的まとまって出土しており、出土量は遺物整理箱で1箱ある。** 

土師器皿は、下層遺構のものに準じて形態的に分類すると、Ⅰ類とⅢ類の2種ある。

I類は、口縁部に上・下のナデを行うが、上段のナデは幅が狭い。口縁端部はナデにより僅かに上方に立ち上がる。法量により2種ある。平均的な法量を示すと、I類1 が口径9.6cm、器高1.6cm、I類2 が口径14.5cm、器高2.6cmある。

Ⅲ類は、口縁部を斜め内上方に折り曲げる。口縁部直下の底部外面は、オサエによって 底部から僅かに高める。平均的な法量を示すと、口径9.9cm、器高1.3cmある。

瓦

出土した瓦には、丸・平瓦、軒丸・軒平瓦のほか、ヘラ記号や刻印を施すものがある。主な遺構における瓦の出土量は、遺物整理箱で、下層遺構が2分の1箱、瓦溜1が30箱、瓦溜2が19箱、瓦溜3が16箱、北縁雨落溝が5箱、東縁雨落溝が4箱ある。瓦溜や下層遺構から出土したものは概して遺存状態が良好であり、完形に近いものもある。他の遺構から出土したものは小片が多い。軒瓦は、総数77点出土した。下層遺構では、軒丸瓦5点、軒平瓦1点ある。瓦溜1では、軒丸瓦9点、軒平瓦5点、瓦溜2では、軒丸瓦8点、軒平瓦1点、瓦溜3では、軒丸瓦10点、軒平瓦1点ある。また東縁雨落溝では、軒丸瓦2点、軒平瓦1点ある。礎石据付穴一・4に伴う礎石抜取穴では、軒丸瓦3点、軒平瓦7点、礎石据付穴二・4に伴う礎石抜取穴では、軒丸瓦3点、軒平瓦7点、礎石据付穴二・4に伴う礎石抜取穴では、軒平瓦2点ある。その他、にぶい黄褐色砂泥層や攪乱壙などから、軒丸瓦5点、軒平瓦7点出土した。さて今回出土した軒瓦は、出土状況や文様構成・成形手法などの特徴から、平安時代中期末のものと、平安時代後期のものに分類した。次にそれぞれの特徴を記す。なお軒瓦についての詳細は表を参照されたい。

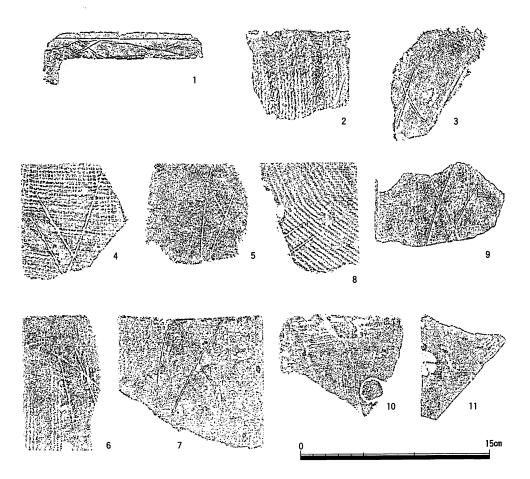


図7 出土へラ記号・刻印瓦拓影

#### 平安時代中期末の軒瓦(図版士・共)

軒丸瓦の瓦当成形手法には、一本造りのもの(1・2)、一本造りの退化・過渡的な手法を示すもの(3・4)、接合式のもの(4と同類の1点)がある。一本造りの退化・過渡的な手法のものには、所謂一本造りの手法で成形するが、丸瓦端部の折り曲げは瓦当中位までで、のち瓦当裏面に補足粘土を貼り付けるもの(3)と、瓦当部は別粘土を使用し、瓦当中位まで丸瓦端部を折り曲げて接合したのち、瓦当裏面に補足粘土を貼り付けて成形するもの(4)がある。接合式のものは、瓦当裏面上端よりやや下った箇所に丸瓦を接合する。接合粘土は多い。瓦当笵はB型が多く、また瓦当部は比較的厚い。

軒平瓦は、平瓦部凸面に補足粘土を付けたものが多い。顎の形態は、曲線顎または段顎を呈する。瓦当笵はB型のものが多い。

これらの軒瓦の中で、(2・7・39)と同類のものは今熊野池田窯跡から、(2・35~38)と同筒もしくは同類のものは太秦森ケ東窯跡から、(7)と同類のものが大宮北山ノ前窯跡から、(2・31・39)と同笵もしくは同類のものは西加茂河上窯跡から出土している。この他の軒瓦も、上に示した軒瓦と共通した文様や瓦当成形手法等の特徴を示しており、ほとんど全てが平安京近郊で生産されたものと理解できる。

平安時代後期の軒瓦(図版書~畫・書・書、大)

軒丸瓦は、瓦当成形手法には接合式のものがある。瓦当裏面上端に丸瓦を接合し、接合 粘土は少ない。瓦当笵はB・C型があり、瓦当部は薄い。

軒平瓦は、瓦当成形手法には、平瓦凸面に補足粘土を貼り付け段顎を呈するもの(41)、 瓦当裏面中位に指ナデで浅い溝を付けて平瓦を当て、凹凸面及び両側面に補足粘土を付け、 バチ形の断面形を呈するもの(42~44)、平瓦広端部を凸面側に折り曲げ、段顎にするもの (39・46~55)がある。

これら軒瓦は、文様や瓦当成形手法などから、概ね河内、播磨、山城各地方でそれぞれ 10) 生産されたものと言える。なかでも山城産のものが量的には主流を占める。

ヘラ記号・刻印瓦 (図7)

へラ記号・刻印を施すものは、総数12点出土した。ヘラ記号は、鋭利な工具を使用して、 2~3本の直線方向の刻線を交叉ないし近接して構成するものと、円形に付すものがある。 瓦溜1では、5点ある。3本構成のヘラ記号を、丸瓦の玉縁に近い凸面に施すもの(4 ~6)と、軒平瓦(図版大 54)の平瓦部凹面中央に瓦当面に近接した箇所に施すもの(7)がある。軒平瓦(図版大 53)では平瓦部凹面に僅かに刻線が1本遺存する。

瓦溜2では、同笵の半截花文軒平瓦にヘラ記号を施すものが2点ある。1点(図版七46)は、平瓦部側面の瓦当面に近接した箇所に2本構成のもの(1)を、1点(8)は、平瓦部凹面中央に3本構成のものを施す。

瓦溜3では、平瓦の凹面に、円形のヘラ記号を施すもの(10)と、花形の刻印を施すもの(11)がある。

雨落溝では丸瓦凸面にヘラ記号を施すものがある。東縁雨落溝では、2本構成のもの(2)、北縁雨落溝では、3本構成のもの(9)がある。

にぶい黄褐色砂泥層から(3)が出土した。丸瓦凹面に2本構成のヘラ記号を施す。

### まとめ

文献史料によれば、法勝寺金堂の回廊は左右各20間、梁間2間の複廊とされ、しかも承暦元年(1077)の落慶供養時には、階上から楽を奏し散華できる程の大規模な構造を有した 二階廊であったことが知られる。

調査では、原位置を保つ礎石は検出できなかったものの、検出した礎石据付穴や雨落溝などから最も矛盾の少ない相互の位置を求め、回廊の復原を試みた。方位については、検出遺構からは求められるものがなく、今回は、仮に座標北を用いた。また所謂軒廊と回廊は直交するものと仮定した。その結果、東廊は桁行、梁間とも1間が約3mの等間であること、外側柱筋と北縁雨落溝心々間及び東縁雨落溝心々間がそれぞれ2.7mあること、内側柱筋と西縁雨落溝心々間が約2.75mあることなどが判明した。これらは、文献史料から窺われる回廊の規模を彷彿とさせるに足る資料と言える。この資料と、金堂跡 I・ II 次調査成果を総合し、金堂・東西廊の復原を図3の模式図として示した。

次に下層遺構と瓦溜2から出土した土師器について述べる。

下層遺構出土土師器は、その出土状況及び形態や法量から、比較的一括性の高いものと言える。この土師器は、高陽院SG1—A出土土師器、烏丸線①一14土壌11出土土師器、14) 平安宮内裏土壙76出土土師器などと形態的に近似する。これらの出土土師器のうち、今回の報告で比較的出土点数の多い土師器皿Ⅰ類と同類のものについて比較を行う。下層遺構のものを基準にすると、SG1—AのものはⅠ類2を除いて0.5~1cm口径が大きい。土壙11のⅠ類1の口径は11cmを満たさない。土壙16ではⅠ類1の口径は10cmある。器高も同様に土壙11・16のものは低くなる傾向を示す。以上のことから、下層遺構出土土師器は、SG1—Aのものより後出で、土壙11のものに先行する一群と言え、11世紀中頃を前後する年代を与えることができる。法勝寺建立前の当該地には、藤原氏累代の別業とされる白河院が営まれており、この時期には藤原頼通の所有になるとされる。

瓦溜2出土土師器と形態的に近似するものには、烏丸線N0.51土壙26出土土師器、烏丸 線D区33WⅡ土壙1出土土師器などがある。形態・法量から、瓦溜2出土土師器は、土壙 26のものに近似し、土壙1のものに先行する一群であると言える。法勝寺は、元暦2年( 1185)に起った大地震によって、当回廊は言うまでもなく、主要堂宇は悉く倒壊する。以上 のことから、瓦溜2出土土師器は12世紀末を前後する年代を与えることができる。 今回の調査では、各遺構から多種多様な瓦が出土した。ここでは軒瓦の検討を行う。

従来より法勝寺創建時の金堂所用瓦については、どの軒瓦を以って所用瓦とするか、出 土瓦の生産・使用年代を含め先学による検討研究が行われてきた。今回の出土瓦の中で平 安時代中期末とした軒瓦は、その使用年代の一点を明示するとともに、使用状況を傍証す る資料と言える。これら軒瓦は、下層遺構、及び下層遺構を掘り下げ削平した遺構である 礎石据付穴一・4や二・4の抜取穴、近在する攪乱等から出土したものが多い。これら軒 瓦は、前述した出土状況や下層遺構から共伴した土師器の年代観からすると、法勝寺造営 前のものに位置付けられ、前述した高陽院SG1―Aからは同笵もしくは同類の軒瓦が出 土している。なお個別的には、軒丸瓦1・2は瓦当成形手法から軒丸瓦の中でも先行する ものと言える。また軒丸瓦3・4は、一本造りの退化・過渡的な瓦当成形寺法を示してい ることと、これらと同笵ないし同類のものであっても接合式のものがあるなど、特徴的な 在り方を示す資料である。さてこれらと同笵もしくは同類の軒瓦は、これまでの六勝寺域 での既往の調査報告によれば、法勝寺を除く調査地点では出土していない。また法勝寺境 内でも金堂の周辺に分布する傾向にある。よってこれら軒瓦は、その年代観や出土状況か ら法勝寺造営前にこの地域に営まれていた白河院内の瓦葺きを以ってする某建物(文献史 料では常行堂がある)所用瓦と推定することは許されよう。只なお創建時の金堂及び回廊所 用瓦については、具体的に把握するには至らず、今後更に検討すべき問題が残されている。

次に平安時代後期の軒瓦については、大半が瓦溜から出土しており、瓦溜2出土土師器から、瓦の投棄年代が明らかにできた。個別的には、軒丸瓦9~12・14と、軒平瓦41~43・45と同笵もしくは同類のものが他の遺跡から出土しており、比較検討が可能と言える。六勝寺域では、長治元年(1104)創建の尊勝寺、大治4年(1129)創建の円勝寺などや、康和4年(1102)創建の醍醐寺大智院などから出土している。また巴文軒丸瓦や剣頭文軒平瓦などは、文様や瓦当成形手法などに新しい要素がみられ、これらの中でも後出的な一群に位置付けられる。なお瓦溜は土器の年代観や瓦の出土状況から、元暦2年の地震に伴う廃瓦投棄用の土壙と考えられ、出土瓦は瓦溜の検出地点から推定すると、回廊あるいは金堂に葺かれた瓦と言える。またこれら軒瓦は、上記各遺跡出土のものとの比較やその年代から、法勝寺創建後の差替えなど補修用の瓦に位置付けられよう。

以上、調査成果について概略を述べてきた。遺構・遺物とも各々重要な情報を含んでおり、法勝寺の復原・研究には欠くことのできない貴重な資料と言えよう。

表1 出土軒瓦観察表

種類	番号	出土遺構	瓦当文様の特徴	瓦当部成形と丸平瓦の特徴	備考
		下層遺構	単弁連華文。	瓦当は折り曲げ成形で、補足粘土	
	1		弁は細長い。	は表面上部に付ける。	
	1		内縁は粗い珠文帯。	瓦当側面調整は上半タテナデ、裏	
			素文の直立縁。	面調整はユビオサエ。	
		下層遺構	単弁連華文。	瓦当は折り曲げ成形。	註21)-134
	2		中房は圏線で、中央に蓮子1個を	瓦当側面調整は上半ナデ、裏面調	13) -9
			配す。	整はユビオサエで布目若干残る。	6) -23
			弁は幅広く宝珠形。		8)-303と同類
軒			外区は圏線が廻る。		
			笵キズ多い。		
		下層遺構	単弁8弁連華文。	瓦当は折り曲げ成形、瓦当上面及	東縁雨落溝より同
			中房は凸線で1+8の蓮子を配す。	び裏面補足粘土を付ける。補足粘	笼1点出土。
			内縁は珠文帯と左回り唐草文。	土は少ない。	下層遺構より同笵
	3		素文の直立縁。	瓦当側面調整は上半タテナデ、後	1 点出土。
			中央に笵割れ。	ヘラケズリ、裏面調整はタテナデ	註21)-236
				後下部のみヘラケズリ。	8)-97と同類
					13)-11と同笵
		下層遺構	単弁8弁蓮華文。	瓦当は折り曲げ成形。瓦当面及び	一・4 礎石抜取穴
			中房は凹む。1+8の蓮子を配す。	裏面に補足粘土を付ける。補足粘	より同類1点出土
			内縁は珠文帯と左回り唐草文。	土は多い。	この瓦当成形手法
	4		素文の直立縁。	瓦当側面調整は上半ナデ、下半ヨ	は接合式。
				コヘラケズリ。裏面調整は上半ナ	
				デ、下半ヘラケズリ。	
丸		礎石据付穴	単弁8弁蓮華文。	瓦当成形不明。	
		一・4に伴う	中房は凸線で1+8の蓮子を配す。	瓦当側面調整は上半ナデ、下半ナ	
	5	抜取穴	内縁は珠文と右回り唐草文。	デ、裏面調整はナデアゲ。	
			筒より瓦当径が小さく、外縁が切り		
			れる。	側面ヘラケズリで凹面側を面取り。	
		にぶい黄褐色	単弁8弁蓮華文。	瓦当成形は不明、補足粘土は多い。	註13)-10と同笵
		泥砂	中房は凹み小さい。1+8の蓮子		
			を配す。	整はタテナデで凹凸がある。	
	6		弁は短かく凸線で囲む。		
			内縁は粗い珠文帯と右回り唐草文。		
			節より瓦当径が小さく外縁が切れ		
			る。中央に絶割れ。		
		礎石据付穴	単弁8弁蓮蓮文。	瓦当成形不明。補足粘土は少ない。	
		一・4に伴う	弁は短かく幅広い。	瓦当側面調整は上半タテナデ、下	
瓦		抜取穴	内縁は密な珠文帯と右回り唐草文。	半ナデ、裏面調整はナデ。 	註21)-235
	7		唐草は強く巻きこむ。		8) -255
			笵より瓦当径が小さく外縁が切れ 		13) -14
			る。		6) -20
			笵は磨滅し、文様は不明瞭。		
		下層遺構	内縁は右回り唐草文。唐草は強く	瓦当成形不明。補足粘土は多い。	にぶい黄褐色砂泥
	8		巻きこむ。	瓦当側面調整はヨコナデ。 	より、同類1点出 
			素文の直立縁。		土。
			笵キズがある。		註13)-13と同笵

	т —	T	The contract of	1	T
		瓦溜 3	複弁 8 弁蓮華文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合	註22)-SWA05-a
		1	中房は圏線で1+4の蓮子を配す。		8)-25と同笵
l	9	İ	弁・子葉とも凸線。	瓦当側面調整はヨコナデ、裏面調	
			素文の直立縁。	整はナデオサエ。	
				笵はB型。	
				丸瓦は凸面縄タタキ、凹面布目。	
		瓦溜 2	複弁8弁蓮華文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合	註19の1)-23B
			中房は圏線で9より小さい、1+	する。補足粘土は少ない。	22)-SWA05-b
	10		4の蓮子を配す。	瓦当側面調整はナデ、裏面調整は	8)-56と同笵
軒	10		弁・子葉とも凸線。	ナデオサエ。	
			素文の直立縁。		
			弁内に2本の笵キズ。		
		瓦溜 1	複弁連華文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合	
			中房は圏線。	する。補足粘土は少ない。	
	11		弁・子葉とも凸線、弁は9・10よ	瓦当側面調整は上半はタテナデ、	
	111		りも小さい。	裏面は強いナデ。	
			素文の直立縁。	丸瓦は凸面ナデ、凹面布目、側面	
			<b>笵に木目出る。</b>	ヘラケズリ後ナデ。	
		瓦溜 1	複弁8弁連華文。	瓦当成形不明。	註19の3)-ER016
	12		中房は大きい。	瓦当側面調整は丁寧なナデ、裏面	と同類
	12		弁は高い。	調整も丁寧なナデで平滑となる。	
			素文の直立縁。		
i		にぶい黄褐色	複弁6弁蓮華文。	瓦当成形不明。	註 8)-180と同笵
丸	13	砂泥。	中房は凸線で左回り二巴文を配す。	瓦当側面調整は下半丁寧なナデ、	20) -01- A
			弁・子葉とも凸線で、子葉には圏	裏面調整も丁寧なナデで平滑とな	202)-1
			線を回す。	る。	21)-1と同類
			素文の直立縁。	表面に離れ砂付着する。	
		瓦溜 2	単弁8弁連華文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合	瓦溜2より同類3
			弁は菱形で髙く、上面は平坦。	する。補足粘土は少ない。	点出土。
	14		中央に半球状の蓮子1個を配す。	瓦当側面調整は上半タテナデ、下	註18の1)-86
	14		素文の直立縁で若干歪む。	半ナデ。	19の3) -ER086
			瓦当面に糸切痕の残るものがある。	笵はB型。	3の1)-3
					8)-186と同類
		瓦溜 3	左回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合	
			巴は太く低い。尾は長く外縁に接	する。補足粘土は非常に少ない。	•
	15		する。	瓦当側面調整はオサエ、ヨコナデ、	ļ
	13		素文の直立縁。	裏面調整はユビオサエで凹凸があ	İ
瓦			文様の上を指で押える。	る。	
				笵はB型。	
		瓦溜 3	左回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ丸瓦を接合す	
			巴は太くやや髙い。頭は15より小	る。補足粘土は少ない。	
	16		さい。尾は長く外縁に接する。	瓦当側面調整はナデオサエ。裏面	
	-		素文の直立縁。	調整もナデオサエ。	
			文様上に木目が出る。	ļ	
			文様上を指で押える。		
		瓦溜 3	左回り三巴文である。	瓦当裏面に溝をつけ丸瓦を接合す	
	17		文様は髙い。尾は長く外縁に接す	る。補足粘土は少ない。	
	- 1		る。	瓦当側面調整はユビオサエ、裏面	

_	_		Tank to the tank	
			素文の直立縁。	調整はナデオサエ。
			文様上をナデ。	
		瓦溜 2	左回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合
		1	文様はやや高い。尾は長く外縁に	する。
	18		接する。	瓦当側面調整はナデオサエ、裏面
			素文の直立縁。	調整はナデ。
			文様上に糸切痕残る。	
		瓦溜 3	左回り巴文。	瓦当成形不明。
	19		文様は低い。尾は長く外縁に接す	瓦当側面調整はヨコナデ、裏面調
軒	13		る。	整はナデ。
			素文の直立縁。	
		瓦溜 1	左回り巴文。	瓦当成形不明。
ł	20		文様断面は三角形。	瓦当側面調整はヨコナデ、裏面調
			素文の直立縁。	整はオサエナデ。
		瓦溜 1	左回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ丸瓦を接合す
	21		素文の直立縁。	る。
	21			瓦当側面調整はナデオサエ、裏面
				もナデオサエ。
		瓦溜 3	左回り巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合
			文様は低い。尾は長く外縁に接す	する。補足粘土は少ない。
	22		る。	瓦当側面調整はナデ、裏面調整も
			素文の直立縁。	ナデ。
			文様上を指で押える。	·
平		瓦溜 3	右回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合
	00		文様は低く細い。尾は長い。	する。補足粘土は少ない。
	23		内縁は珠文帯。	瓦当側面調整はオサエナデ、裏面
			素文の直立縁。	調整はナデ。
		瓦溜 2	右回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合
	24		文様は低く細い。尾はやや長い。	する。補足粘土は少ない。
	24		内縁は珠文帯。	瓦当側面調整はオサエナデ、裏面
			素文の直立縁。	調整もオサエナデで、平坦である。
		瓦溜 3	右回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合
	25		文様は低く尾はやや長い。	する。
	25		内縁は大きい珠文帯。	瓦当側面調整はオサエナデ、裏面
	L		素文の直立縁で若干歪む。	調整はナデ。
		瓦溜 1	右回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合
			文様はやや低く、尾はやや長い。	する。
瓦	26		内縁は大きい珠文帯。	瓦当側面調整はオサエナデ、裏面
1	Ì		素文の直立縁。	はナデ。
				笵はB型。
		瓦溜 3	右回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合
			文様は低い。	する。補足粘土は少ない。
	27		内縁は大きい珠文帯。	瓦当側面調整はオサエナデ、裏面
1			素文の直立縁。	調整はナデ。
	L			笵はB型。
1		瓦溜 1	右回り三巴文。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合
1	28		文様は低い。頭部が接する。	する。
			内縁は珠文帯。	瓦当側面調整はナデ、裏面調整も

			まさのまさ組	1 7 - 7 10 - + 2	T
軒			素文の直立縁。	ナデで平坦である。 	
1			笵キズがある。		
丸			小型の瓦。		
瓦	29	瓦溜 1	太い圏線が巡る。	瓦当裏面の補足粘土は少ない。	
			大きい珠文帯。		
	ļ	礎石据付穴	4 回反転均整唐草文。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り	一・4 礎石抜取穴
		ー・4に伴う	唐草は1単位ずつ離れる。	付ける。段顎。	から同笵1点出土。
	30	抜取穴	内縁は小さく粗い珠文帯。	瓦当調整は下面ヨコヘラケズリ、	二・4 礎石抜取穴
			素文の直立縁。	側面タテヘラケズリ、裏面はナデ	から同笵1点出土。
				オサエ。	註13)-39と同類。
		礎石据付穴	唐草文。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り	
軒		二・4に伴う	   唐草は強く巻き、連続する。	   付ける。曲線顎。	
''		抜取穴	   内縁は大きい珠文帯。	瓦当調整は上・下面ヨコヘラケズ	
		12-12-1	素文の直立縁。	リ、裏面はタテヘラケズリ後ヨコ	
	31		笵よりも瓦当幅が広い。	ナデ。	
			TEST / OZELITANIA ZA O	^ ^。   平瓦は凹面細かい布目、凸面タテ	
				へうケズリ、側面へラケズリで凸	
				・凹面側共、面取りする。	
		下層遺構	均整唐草文。		註21)-475
		1 管理件		瓦当成は不明。	
	32		唐草は矮小化する。	瓦当調整は不明。 	13)-37と同笵
			内縁は密な珠文帯。		
		1-12. #449.6	素文の直立縁。	T. J. A. W. C. J. A. W. M. C. T. T. J. M.	
		にぶい黄褐色	均整唐草文。	瓦当成形は広端部が厚い平瓦を使	
		砂泥	唐草は矮小化する。	用。段顎。	
	33		外縁は小さく密な珠文帯。	瓦当調整は上面ヨコヘラケズリ、	
平			素文の直立縁。	下面ナデオサエ、側面タテヘラケ	
		_		ズリ。裏面はナデオサエ。	
		礎石据付穴	均整唐草文。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り	註13)-38と同笵
	34	一・4に伴う	唐草は矮小化する。	付ける。段顎。	
	01	抜取穴	内縁は珠文帯。	瓦当調整は上面・下面・側面ヨコ	
			素文の直立縁。	ヘラケズリ。裏面はオサエナデ。	
		攪 乱	左向き、扁行唐草文。	厚い平瓦を使用し、顎は押え瓦当	註21)-457・458
			唐草は強く巻く。	部を成形する。	と同類
			内縁は粗い珠文帯。	瓦当調整は上面軽いオサエ、下面	
	35			ナデ、側面ヨコナデ、裏面オサエ。	
			る。	平瓦は凹面粗い布目、凸面オサエ・	
				ナデで凹凸がある。側面はタテへ	
				ラケズリ。	
		にぶい黄褐色	3回反転均整唐草文、中心で交わ	軒瓦用の厚い平瓦を用い、瓦当部	
瓦		砂泥	る。	を成形。段顎。	
			唐草は強く巻きこむ。	瓦当調整は上面オサエ、下面ヨコ	
			文様は低い。	ヘラケズリ、側面タテヘラケズリ、	
	36		<b>范より瓦当が薄く、外区なし。</b>	裏面ユビオサエ。	
				平瓦は凹面太い布目、凸面ユビオ	
				サエ・ナデで凹凸がある。側面は	
				タテヘラケズリ。	
		下層遺構	3回反転均整唐草文、中心で交わ	軒瓦用の厚い平瓦を使用し、瓦当	註13)-41と同范
	37		<b>3.</b>	部を成形する。	2の1)-図13-1

				- James 1 1 7 11	01) 447 440
			唐草は強く巻きこむ。	瓦当調整は上面ヨコヘラケズリ、	21) -447 • 448
			素文の直立縁。	下面オサエナデ、側面タテナデ、	と同類
	37		笵より瓦当が薄く、下区が切れる。		
	31			平瓦は凹面粗い布目、凸面オサエ	
				ナデで、凹凸がある。側面はタテ	
				ナデ。	
		礎石据付穴	3回反転均整唐草文、中心で交わ	軒瓦用の厚い平瓦を用い、瓦当部	註2の2)-図9-23と
		ー・4 に伴う	る。	を成形。曲線顎。	同笵
		抜理穴	唐草は強く巻きこむ。	瓦当調整は上・下面ヨコヘラケズ	
軒			文様は低い。	リ、側面タテヘラケズリ、裏面は	
''	38		素文の直立縁。	ユビオサエで凹凸が激しい。	
			   笵より瓦当が薄く、外区が切れる。	平瓦は凹面、細かい布目、凸面オ	
			文様上に離れ砂付着。	サエナデで凹凸があり、部分的に	
			30,000	平行の圧痕がある。側面はタテヘ	
				ラケズリ。	
		礎石据付穴	3回反転均整唐草文。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り	註 6)-22と同類
		一・4に伴う	唐草は2重凸線で連続する。	付ける。段類。	E 07 BEC1738
		抜取穴	内縁は大きく粗い珠文帯。	瓦当調整は上・下・側面ヨコヘラ	
	39	12427		ケズリ、裏面はナデで接合部は強	
	00		る。	くオサエる。	
			30	ヾ゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ヾ゚゙゙゙゙゙ヾ゚゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙	
				十九は四面、細がい中日、口面ゥ   テナデ、側面タテヘラケズリ。	
		瓦溜 2	   唐草文。	フノノ、関ロタクペンクスリ。    瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り	
平		儿 個 2	信中之。   唐草の巻き弱い。	[	
'	40		信手の名さ弱で。   素文の直立縁。	付ける。	
			未入り直立版。	瓦当調整は下・側面ヨコナデ、裏	
		瓦溜 2		面オサエナデ。	17 27、共和女が知
		凡值 2	3回及転均量/日早又。   唐草は太く、1単位ずつ離れる。		にぶい黄褐色砂泥
			素文の直立縁。	付ける。段顎。	より同笵1点出土
			** ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** **	瓦当調整は下・側面はヨコナデ、	註3の1)-19
	41			上面は不調整。裏面はオサエ、ヨ	
				コナデ。	同笵
				平瓦は凹面、細かい布目、凸面タ	
				テヘラケズリ、側面タテヘラケズ	
		にぶい黄褐色	3回反転均整唐草文。	リ後タテナデ。	##10 @1\ 000
		砂泥		瓦当裏面中央に溝をつけョコナデ	
	42	1976	唐草は強く巻き、子葉が2つに分		19の3) E R 233
<del></del>			かれて山形をつくる。	瓦当調整は上・下・側面共ヨコナ	-A
瓦		TE SOI O	素文の直立縁。	デ。	21)-451と同類
		瓦溜 2	唐草文。	瓦当裏面中位に溝をつけ平瓦を接	
	42		唐草は巻きこむ。	合する。	
	43		素文の直立縁。	瓦当調整は上面ヨコナデ、下面ヨ	
				コヘラケズリ、側面タテナデ、裏	
		瓦溜 2	2 同居転換數据基本	面ヨコナデ。	#hao = a\ o.o.;
		上上 催 乙	3回反転均整唐草文。	瓦当裏面中央に溝をつけ、平瓦を	註19の1)-240と
	44		唐草は強く巻く。   妻女の真立婦	接合する。バチ形。	同笵
	44		素文の直立縁。	瓦当調整は上・下・側・裏面ヨコ	
				ナデ。	
				平瓦は凹・凸面ヨコナデ、側面は	

_	_			タテナデで丸くなる。	
		TET 2001 O	ナウも2回屋転馬に座井寺		
		瓦溜 2	右向き3回反転扁行唐草文。	瓦当成形不明。	
			素文の直立縁。	瓦当調整は上面斜方向のヘラケズ	i
ļ	45			リ、下面ヨコナデ、裏面オサエ後	
				ヨコナデで凹凸がある。	
				平瓦は凹面布目、凸面ナデで、糸	
1				切痕がある。側面ヘラケズリ。	
		瓦溜 2	3回反転均整唐草文。	瓦当は折り曲げ成形。	瓦溜2より同施1
			唐草は太く、連続しない。	瓦当調整は下・側面ヨコヘラケズ	点出土。
1			中心飾は3重半截花文。	リ。裏面オサエ後ヨコナデで、布	註19の3)-SR272
軒	46		素文の直立縁。	目の付くものがある。曲げじわが	В
	140		文様上半に布目がつく。	ある。	21) -542
				平瓦は凹面細かい布目、凸面縄タ	8)-193と同笵
				タキ後ナデ、側面はタテヘラケズ	
				リで、凹・凸面側共面取りする。	
		瓦溜 2	3 単位均整半截花文。	瓦当は折り曲げ成形。段顎。	瓦溜2より同笵3
			中心飾は下から中央までの凸線。	瓦当調整は上面斜めヘラケズリ、	点出土。
			素文の直立縁で上外区はない。	下面ヨコナデ、側面タテヘラケズ	
			文様上面に布目がつく。	リ後ナデ。裏面オサエナデ。曲げ	
	47			じわあり。	
	47			平瓦は凹面布目で糸切痕がある。	
ļ				凸面縄タタキ後ナデ、側面ヘラケ	
				ズリで凹面側のみケズリで面取り。	
				側面にヘラ記号。	
平		瓦溜 3	幾何学文。	瓦当は折り曲げ成形。段顎。	
			文様は10個連続。	瓦当調整は下面ヨコヘラケズリ、	
			素文の直立縁。	側面タテヘラケズリ、裏面強いヨ	
			上外区に布目付く。	コナデで凹凸があり曲げじわがあ	
	48			る。	
				平瓦は凹面、細かい布目で下に糸	i
				切痕、凸面ナデ、側面タテヘラケ	
			·	ズリ。	
				笵はB型。	
		瓦溜 1	剣頭文。	瓦当は折り曲げ成形。段顎。	
			文様は8個。	瓦当調整は上面斜方向のヘラケズ	
			外縁は素文。	リ、下面ヨコヘラケズリ、側面ナ	•
				デ、裏面オサエ・ナデ。曲げじわ	
	49			あり。	
瓦				平瓦は凹面、細かい布目で、下に	
				糸切り痕、凸面細い格子タタキ目	l
				で、上をナデる。側面タテヘラケ	
			All the L	<i>ズ</i> リ。	
		東縁雨落溝	剣頭文。	瓦当成形は不明。段顎。	
			文様は低い。	瓦当調整は上面斜方向のヨコヘラ	
	50		外縁は素文。 	ケズリ、下面ヨコヘラケズリ、側	
				面ナデ、裏面オサエで曲げじわ多	
				V30	
$oxed{L}$				平瓦は凹面、細かい布目、凸面は	

				丁寧なタテナデ、側面タテナデ。	
1		にぶい黄褐色	剣頭文。	瓦当成形は折り曲げ成形。段顎。	
		砂泥	文様は幅広い。	瓦当調整は上面斜方向のケズリ、	
軒	51		外縁は素文。	下面ヨコナデ、裏面ナデ。曲げじ	
				わあり。	
				平瓦は凹面、粗い布目、凸面ナデ。	
		瓦溜 1	剣頭文。	瓦当は折り曲げ成形。段顎。	
	52		外縁は素文。	瓦当調整は下面ヨコヘラケズリ、	
		-		裏面オサエで曲げじわが多い。	
		瓦溜 1	剣頭文。	瓦当は折り曲げ成形。段顎。	
平		-	外縁は素文。	瓦当調整は上面は斜方向のヨコへ	
				ラケズリ、下面ヨコヘラケズリ、	
	53			裏面から平瓦下面に粗い布目。	
				平瓦は凹面太く粗い布目、凸面ナ	
				デ。	
				凹面にヘラ記号。	
		瓦溜 1	剣頭文。	瓦当は折り曲げ成形。段顎。	
瓦			外縁は素文。	瓦当調整は上面ヨコヘラケズリ。	
	54			裏面に布目。	
				平瓦は凹面粗い布目。	
				凹面にヘラ記号。	
		瓦溜 1	剣頭文。	瓦当は折り曲げ成形。段顎。	49と同類
	55		外縁は素文。	瓦当調整は上面ヨコヘラケズリ。	
	33			裏面に曲げじわ。	
				平瓦は凹面粗い布目。	

表 2 出土軒瓦計測表

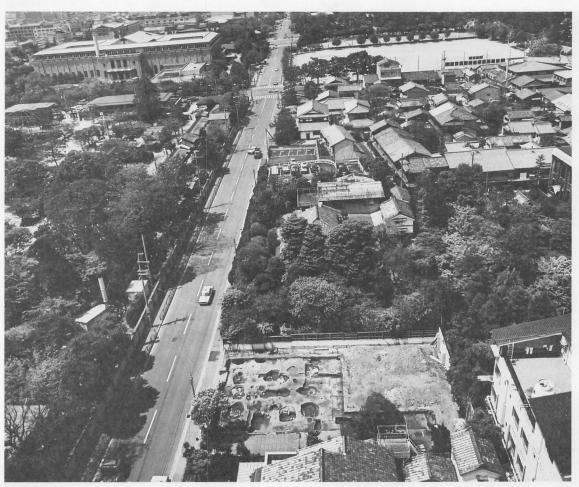
				内		ζ.		·	夕	<b>}</b>	区			個食
	番	直	中	蓮	弁	弁	弁	外	内	径	外	徝	£	(同類合
			房	子	区			区	it is	文様	幅	高	文様	t t
	号	径	径	数	径	幅	数	広	幅	様	'YEE	[=]	様	さむ) 数
	1				3.5	0.9		3.1	1.5	S	1.5	0.2	素	1
	2		3.5	1	4.9	4.9	5	1.1			0.5	0.2		1
	3	13	3.0	1+8	2.2	1.8	8	3.2	1.0 1.3	S 16 H K	1.0	0.4	素	3
軒	4	11.7	3.0	1+8	2.8	1.9	8	1.8	$\begin{array}{c c} 0.7 \\ 1.1 \end{array}$	S 16 H K				2
	5	13.4	2.8	1+8	2.6	1.8	8	2.7	$\frac{0.9}{1.2}$	S 16 H K	0.6	0.2	素	1
	6	13.1	2.8	1+8	2.6	2.2	8	2.1	1.0	S HK				1
	7	12.8				1.8	8	2.7	1.0 1.7	S 37 H K				2
	8								1.4	ΗK	1.4	0.4	素	2
	9	13.5	5.7	1+4	2.1	3.0	8	1.0	:		1.0	0.4	素	1
	10	13.7	5.3	1+4	2.9	3.4	8	1.4			1.4	0.4	素	1
	11				2.1	3		1.0			1.0	0.4	素	1
	12				2.5	4.2		1.5			0.5	0.8	素	1
丸	13				3.1	4.3		1.4			1.4	0.8	素	1
	14	14.1	3.0	1	3.1	2.8	8	1.1			1.1	0.5	素	4
	15	16.2						1.4			1.4	0.6	素	1
	16	15.2						1.1			1.1	0.6	素	1
	17							1.4			1.4	0.6	素	1
	18	15.7						1.1			1.1	0.6	素	1
	19							1.3			1.3	0.2	素	1
	20							1.1			1.1	0.5	素	1
	21							1.1			1.3	0.6	素	1
瓦	22							1.2			1.2	0.5	素	1
	23	15.4						2.7		S 26	1.3	0.8	素	1
	24	15.0						3.2	İ	S	1.2	0.8	素	1
1	25							2.5		S	1.2	0.6	素	1
1	26							3.0		S	1.3	0.8	素	1
	27							3.4		S	1.3	0.8	素	1
	28							2.0		S	0.4	0.9	素	1
	29							2.9		S.圈	1.0	0.5	素	1
	不明													5
	計													42

	番	上	弧	下	厚	内	区	上外	区	下外	区	脇	区	文样	個
	号	弦弧	深さ	弦弧	<b>3</b>	厚さ	文様	厚さ	文様	厚き	文様	厚き	文様	文様深さ	体数
	30				6.0	1.8	КК	1.0	S	1.2	S			0.1	3
	31				5.7	2.6	K	1.2	S	1.1	S	1.1	S	0.1	1
	32					1.5	K	1.0	S		S	0.7	S	0.1	1
軒	33				7.0	1.5	K	0.9	S	0.9	S	0.7	S	0.2	1
+1	34				5.6	1.6	K	0.7	S	0.9	S	1.3	S	0.2	1
	35				6.0	3.5	K	1.2	S	0.6	S			0.1	1
ì	36				4.8	4.8	KK							0.1	1
	37				5.6	4.8	KK	0.4	素					0.1	1
	38				4.3	4.3	KK	0.9	素					0.2	1
	39	20.0	2.8	19.5	5.4	2.8	KK	1.2	S	1.1	S			0.1	1
	40				5.7	3.4	K	1.0	素	0.7	素			0.1	1
平	41				4.5	2.6	K	0.8	素	0.8	素	0.7	素	0.2	2
	42				5.8	3.5	K	0.8	素	0.6	素	1.7		0.3	1
1	43				5.8	3.2	K	0.9	素	0.7	素	1.2	素	0.2	1
1	44				6.1	2.4	K	0.4	素	0.8	素	1.0	素	0.1	1
	45	25.0	2.9	24.8	5.2	3.1	нк	1.2	素	0.6	素	0.9	素	0.2	1
	46		2.4		5.4	3.1	KK			1.1	素	1.1	素	0.2	2
	47	21.3	2.0	21.5	4.4	2.8	半花			0.7	遷	0.7	圏	0.2	4
	48	21.5	1.5	21.9	5.0	2.9	幾10	0.4	素	0.5	素	0.5	素	0.2	1
瓦	49	20.0	2.1		3.8	2.7	ΚN	0.4	素	0.4	素			0.3	1
	50				4.5	2.0	KN	0.9	素	0.8	素			0.2	1
	51				3.7	2.3	ΚN	0.2	素	0.6	素			0.3	1
	52				3.7	2.6	ΚN	0.2	素	0.3	素			0.3	1
	53					2.4	ΚN	0.2	素	0.6	素			0.4	1
	54						ΚN	0.3	素		素			0.2	1
	55				3.9	2.8	ΚN	0.5	素	0.5	素			0.3	1
	不明														2
	計														35

S:珠文 K:唐草文 HK:扁行唐草文 KK:均整唐草文 KN:剣頭文

#### 註

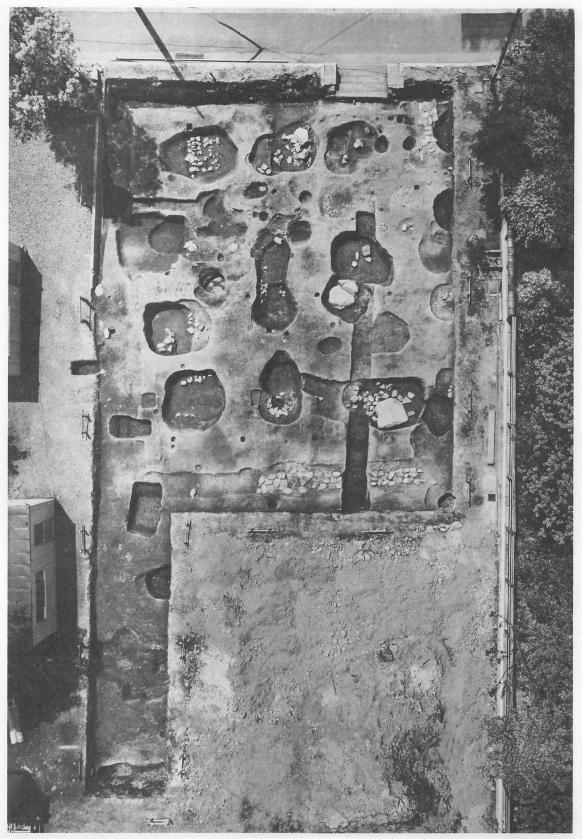
- 1) 法勝寺を含む六勝寺については先学による多くの論文がある。
  - 1 西田直二郎「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第六冊
  - 2 清水 壙「六勝寺の伽藍とその性格」『建築史学』第5号 1985年
- 2) 1 「法勝寺跡」『京都市埋蔵文化財年次報告』1974─Ⅲ 京都市文化観光局文化財保護課 1975年
  - 2 「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 同上1976年
- 3) 1 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う"法勝寺跡"発掘調査報告」六勝寺研究会前掲註2) 1 所収
  - 2 「法勝寺跡(1)」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研 究所 1983年
- 4) 「法勝寺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(発掘調査編)同上 1982年
- 5) 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」『延喜天暦時代の研究』1969年
- 6) 青山均・木村捷三郎「瓦塼類・出土瓦の考察」『大谷中・高等学校内遺跡発掘調査報告書』 1984年
- 7) 梶川敏夫「平安京の瓦」『古代の瓦を考える一年代・生産・流通一』1986年
- 8) 京都市埋蔵文化財研究所編『坂東善平収蔵品目録』1980年
- 9) 前掲註7)
- 10) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号 1978年
- 11) 前掲註2)-2では金堂基壇延石から「磁北より6°09′20″東へ振れ」る方位を示している。
- 12) 金堂も今回の復原では方位に座標北を用いた。金堂の位置は報告書を参照した。また金堂身 舎桁行は等間とした。回廊の20間は、内側・中央・外側各桁行の何れを採用するかにより異 なる(点線)。
- 13) 「左京二条二坊(2)高陽院跡」『平安京跡発掘調査概報』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 14) 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 I』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1979年
- 15) 「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1986年
- 16) 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
- 17) 同上
- 18) 1 杉山信三・岡田茂「尊勝寺跡発掘調査報告―京都会館建設地の調査―」『平城宮・伝飛



1 アドバルーン空撮 (東から)

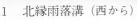


2 調査区全景(北から)



アドバルーン空撮全景 (上から)







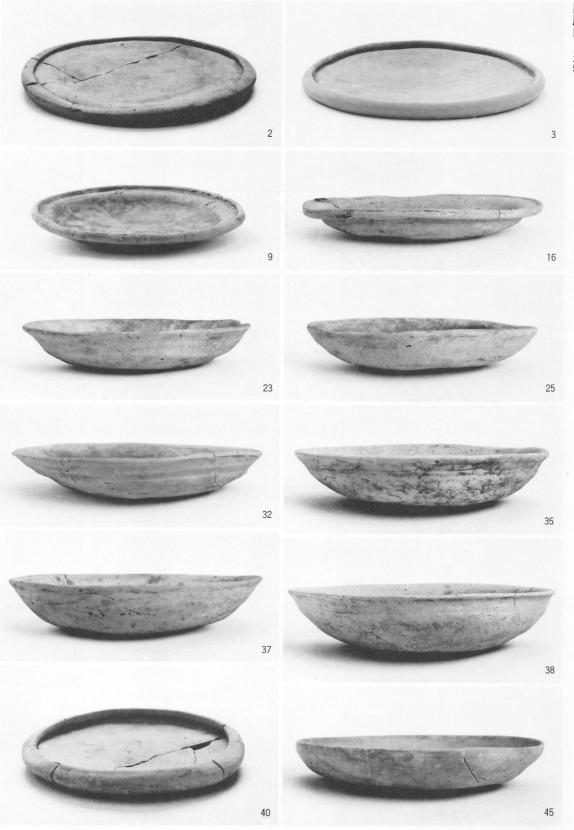
2 西縁雨落溝(北から)



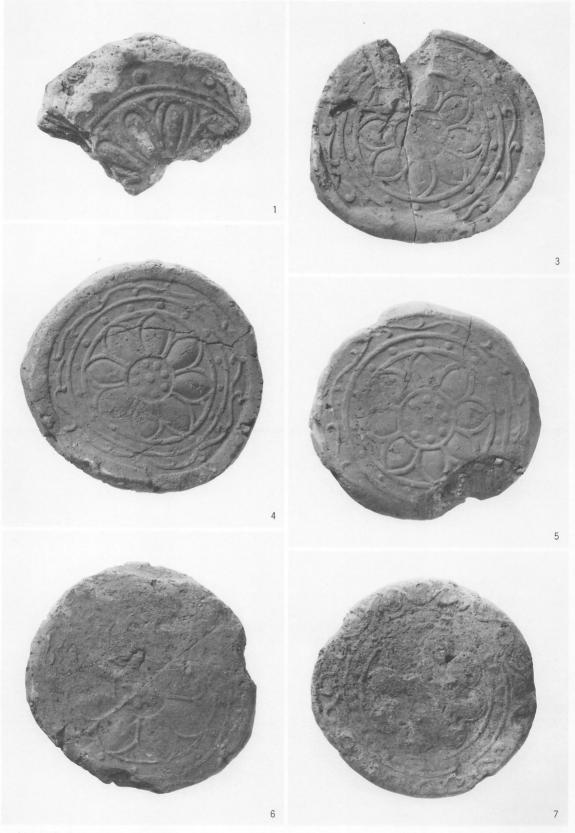
3 礎石据付穴二・1 (南東から)



4 礎石据付穴三・1と礎石(西から)



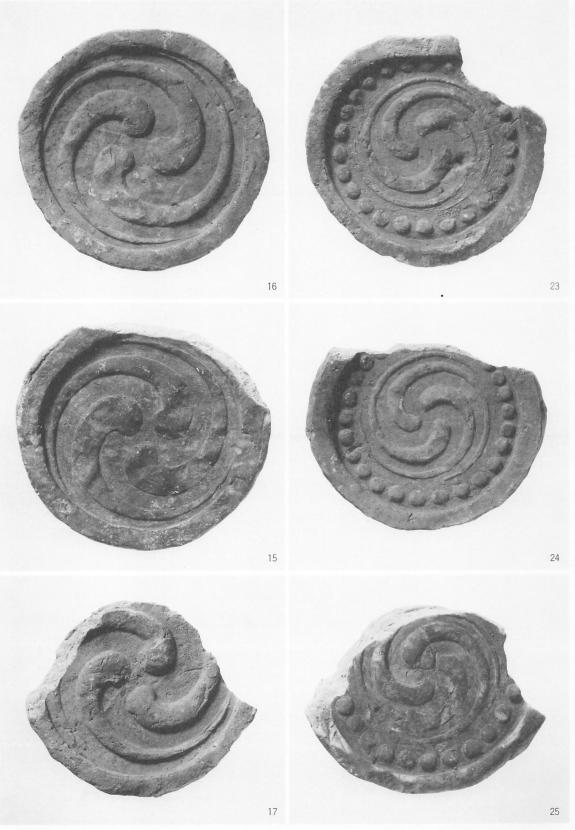
出土土師器



出土軒丸瓦



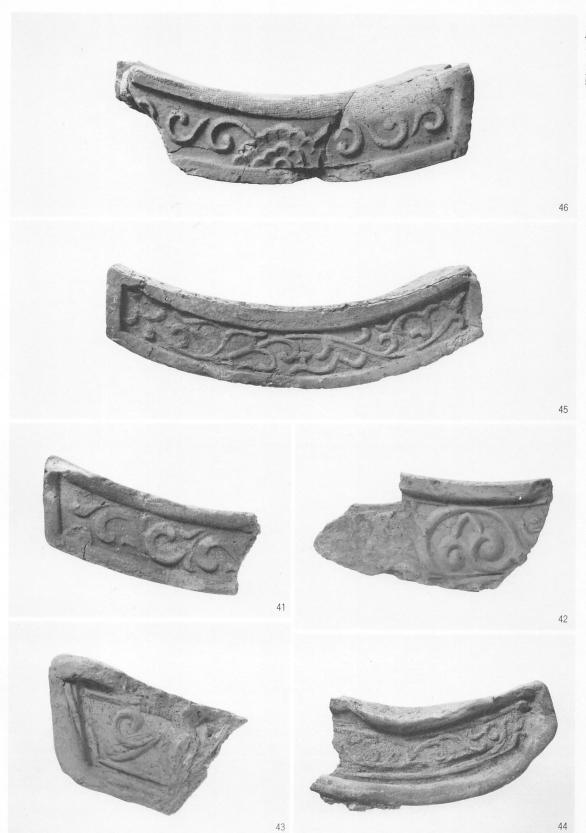
出土軒丸瓦



出土軒丸瓦



出土軒平瓦



出土軒平瓦









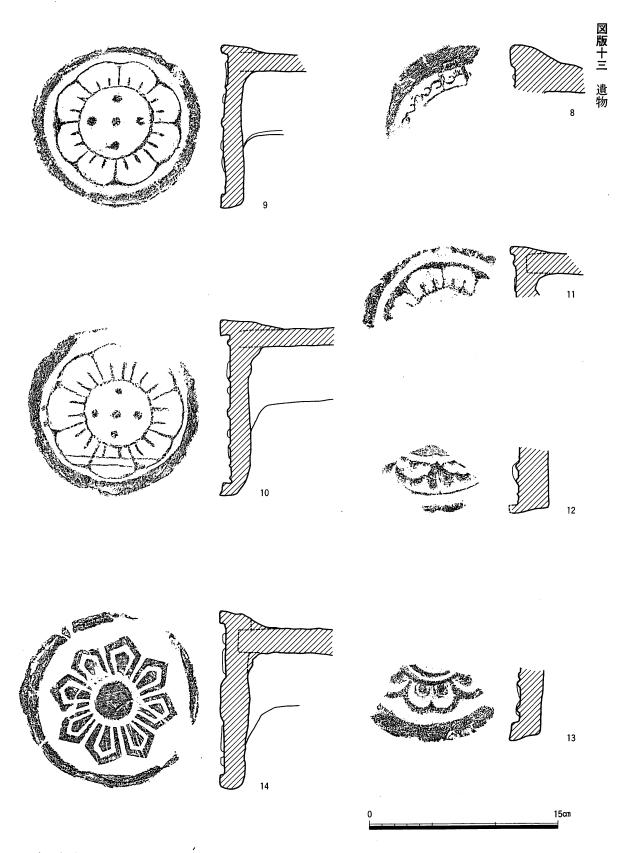




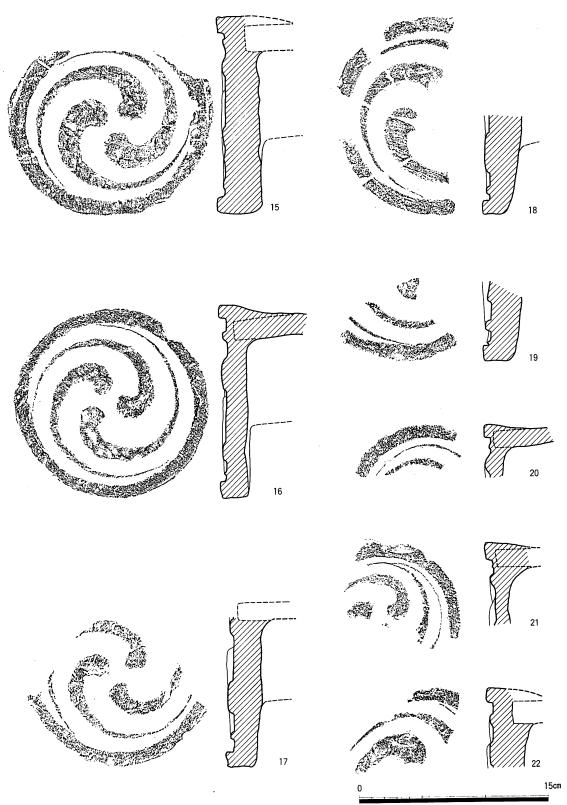
出土軒平瓦

遗構実測図

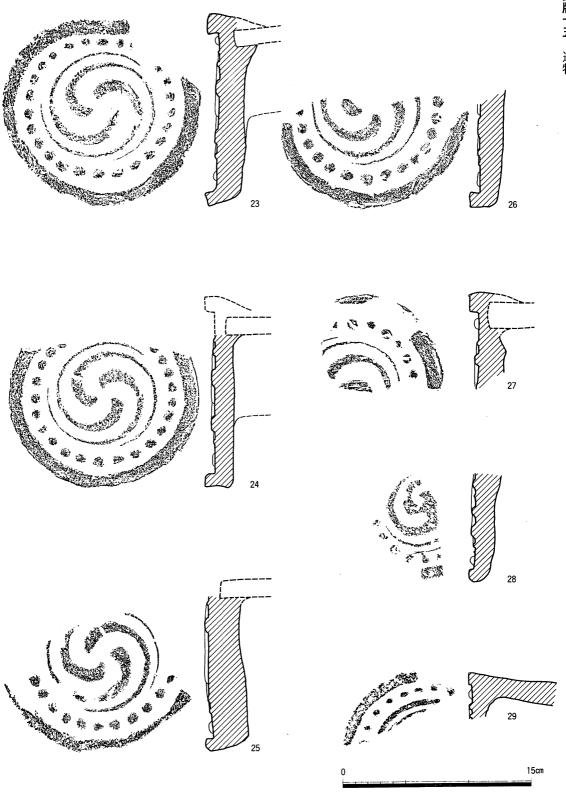
出土軒丸瓦拓影・実測図



出土軒丸瓦拓影・実測図

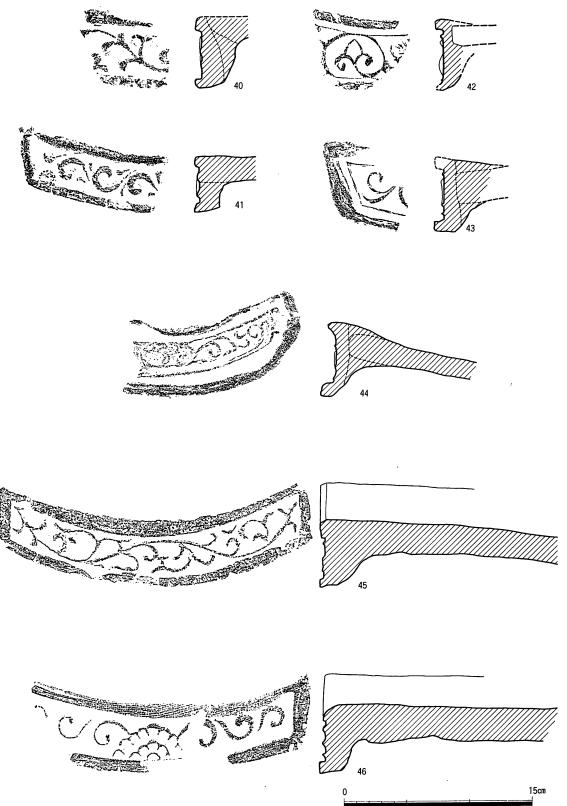


出土軒丸瓦拓影・実測図

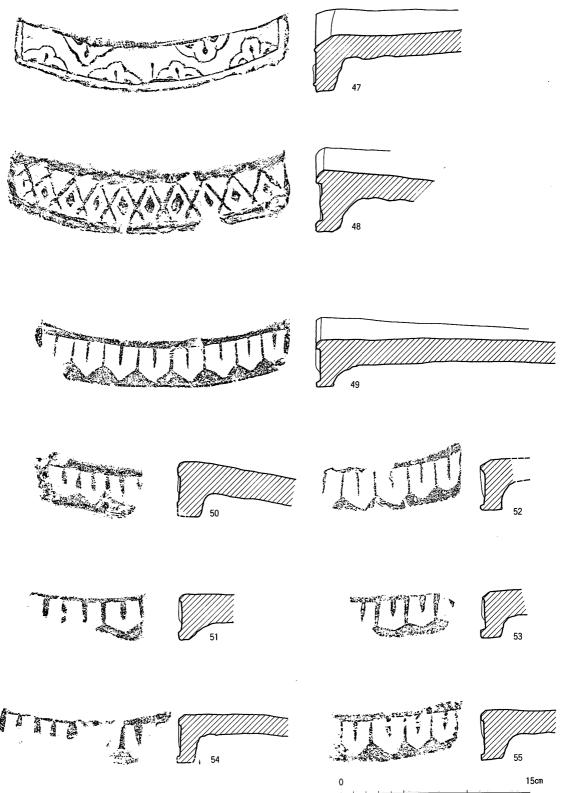


出土軒丸瓦拓影・実測図

出土軒平瓦拓影・実測図



出土軒平瓦拓影・実測図



## 法勝寺跡発掘調査概報

昭和61年度

発行日 昭和62年3月31日

発 行 京都市文化観光局

住 所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町

TEL (075) 415-0521

印刷真陽社